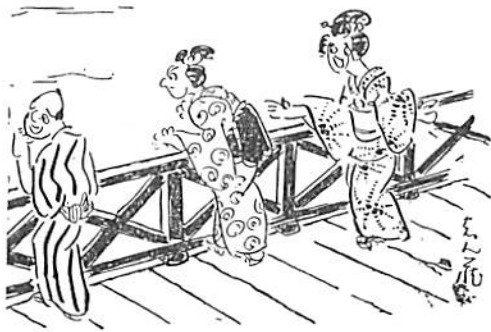


『何云ふてんね。向ふに停つてる川市丸ちウ大きな船や。あの船は鳥渡動かせんので此小さい舟で通ふのんや。……オイ船頭はん、あの川市丸へ遣てんか。』

『へ宜ろしおます。やツ。うーんとしよウ（唄い夏の涼みは大川で、出舟入舟家形舟、上る流星ほし降り、玉屋が取り持つ縁かいナ。）』

『や御苦勞はん。是れ少しやが取といて。』



『大きに有難うはんで……。』

『清やん、今船頭に錢遣たんあら何やね。』

『舟賃や無いかいナ。』

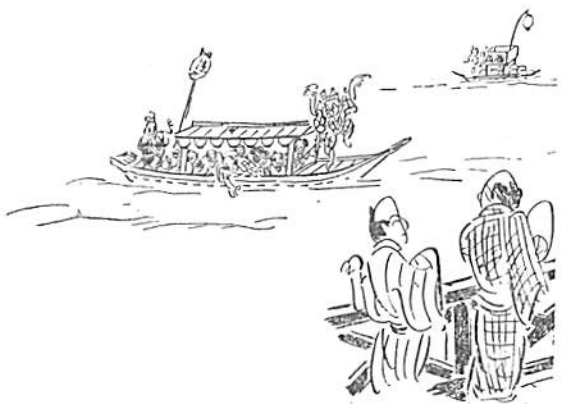
『ヒエツ。向ふから此處までが一朱か。ウワー高やの。そんなやつたら俺いに云ふたら負てふ來たるのに。あれはお前の自腹か。』

『いや、皆割前の中から出すのや。』

『ギエツ。割前の中からかいナ。もう其様手荒ふ遣ふてないナ。』

『ビク／＼すない。今日は遣ひに來てるのやがナ。』

『割前の中からやつたら、お前にばつかり禮云わさんと俺にかて禮云ふて貰ふてえナ。』



『何ふでも宜えやないかそんな事。船頭はんチョツと此男にも禮云ふたつてんか。』

『え、其方の旦那、大きに有難うはんで……。』

『それ禮云ふてるがナ、そつちの旦那大きにと……。』

『お、お。』

『豪ら相に納まりないナ。……いや誰方も遅ふ成つて濟まん。喜イ公を誘ひに往た處が例の噪村屋のゴテで隙取つたんや。オイちよねヤン。お前の喧嘩相手が來たで……。』

『まア喜さんの辨……。』

『シツ……。』



『ホ、左様か。やれ喜伊さんの持ッあん／＼。』

『へ、。清やん、ちよね公が俺いの事を持つアんで云ひよる。』

『持ッあんで何の事や知つてるか。』